

武蔵野日曜集会

いつくしみとにくしみ

――ヨハネ伝第15章18～26節――

1968年5月12日

小池辰雄

「世」は闇の世 キリストを受けとらざることが罪 真理の御霊きたらん時 まずキリストにぶつからなくては 自我が降参しなくては 己を憎む 己を愛する いつくしみとにくしみ 愛線と義線のクロス 贖いによつて赦す 救済の愛 我はエホバなり 真理の御霊のきたらんとき 必ず天上で全くされる

【ヨハネ15・18～26】

18 世もし汝らを憎まば、汝等より先に我を憎みたることを知れ。19 汝等もし世のものならば、世は己がものを愛するならん。汝らは世のものならず、我なんじらを世より選^{おほ}びたり。この故に世は汝らを憎む。20 わが汝らに「僕はその主人より大^{おほ}ならず」と告げし言をおぼえよ。人もし我を責めしならば、汝等をも責め、わが言を守りしならば、汝らの言をも守らん。21 すべて此等のことを我が名の故に汝らに為^なさん、それは我を遣し給いし者を知らぬに因る。22 われ来^{きた}りて語らざりしならば、彼ら罪なかりしならん。されど今はその罪いいのがるべき様なし。23 我を憎むものは我が父をも憎むなり。24 我もし誰もいまだ行わぬ事を彼らの中に行わざりしならば、彼ら罪なかりしならん。然れど今ははや我をも我が父をも見たり、また憎みたり。25 これは彼らの律法に「ひとびと故なくして、我を憎めり」と録したる言の成就せん為なり。26 父の許より我が遣^{つか}さんとする助主^{たすけぬし}、即ち父より出づる真理の御霊のきたらんとき、我につきて証^{あかし}せん。27 汝等もまた初^{はじ}より我とともに在りたれば証するなり。

●「世」は闇の世

18 世もし汝らを憎まば、汝等より先に我を憎みたることを知れ。19 汝等もし世のものならば、世は己がものを愛するならん。

キリストと世が完全に対立するということです。ヨハネ伝では「世」は闇の世です。キリストは光です。光と闇ですから、これはレンブラントの絵みたいにはつきり対立する。

「世は汝らを憎む」

という。「汝ら」というのはキリストに属する者、キリスト者。キリスト者に対して世は憎



むと。憎しみですね。世は憎むという。これは弱ったことですが。しかし、
汝等より先に我を憎みたることを知れ。

お前たちを憎むよりか先に、私を憎んでいるんだ。こっちの線の方が先なんだ、強いと。

¹⁹ 汝等もし世のものならば、世は己がものを愛するならん。

今度は、「世のもの」という、世に属する者。これは結局、全部が世になってしまいうんだけれども。これは愛すると。

今日は、「いつくしみとにくしみ」なんていう――「愛と憎」と書くかと思っただけでも、日本語はちよつとおもしろいからね、「くしみ」の上がちがうだけで――題にしました。

汝らは世のものならず、我なんじらを世より選びたり。この故に世は汝らを憎む。

と。私がお前たちを選び別った、召した、召命した――選びでも召すでもいいです――そうしたらば、私を憎んでいるから、必然、当然、お前たちも憎むことになると思う。

その前にキリストは、

「父の我を愛し給いしごとく我も汝らを愛したり。わが愛に居れ」

と、9節に書いてある。「父―我―汝らキリスト者」と、この関係が愛の関係です。こっちの世の方にも「愛する」と書いてある。

²⁰ わが汝らに「僕はその主人より大ならず」と告げし言をおぼえよ。人もし我を責めしならば、汝等をも責め、わが言を守りしならば、汝らの言をも守らん。

もうそれはみんな因果関係があると。

²¹ すべて此等のことを我が名の故に汝らに為さん、それは我を遣し給いし者を知らぬに因る。

キリストにはまたいつも上がある。イエスの上がいる。父がね。

²² われ来りて語らざりしならば、彼ら罪なかりしならん。

ちよつとこれが飛躍したような言い方です。

「私がこの世界にやってきて、天界からこの地界にやってきて、受肉して、そして語らなかつたならば、彼らは罪なかりしならん」

と。キリストの言葉によって、それで世は罪というものがはつきりと顕れてきた。キリストが言わなければ、罪はなかったと。これはどういうことでしょうかね。ちよつとそこに飛躍があるわけです。

●キリストを受けとりしことが罪

キリストの言葉は、第三者として客観的に

「これは真理である」



なんてな、そんなものではないですよ。

「恩恵と真理」

という、あの「真理」「アレテイヤ」という言葉をどうも近代人はすぐいわゆる客観的な真理のように思う。そうじゃないんです、あの「真理」という言葉は。これはクリスチャンがよくわきまえてくれなければ困る。

キリストの言葉は、全存在的に「然り^{しか}」と言うか「否^{いな}」と言うか、どっちかに決められる言葉なんです。

「そういうこともあるう」

なんて、ただそう言っているようなそういう世界ではない。だから、キリストの言葉は、

「受けるか受けないか、信受するか不信受か」

と。即ち、キリストの言葉を受けとらない、それをまこととしないことが「罪」なんです。

「私が語ったら、お前たちが拒んだらう。拒んだことが罪ということなんだよ」

と。そこで、罪が顕れるという。

「私が言わなかったならば、罪がわからなかった」

と。まあ相対的な道徳的な罪くらいなことはわかったでしょう。けれども、キリストが言っているところの「罪」というのは、そんな相対的な善悪の事態ではない。

「わが語りし言葉を受けとるか受けとらないか」

不信が罪の根底なんです。罪の罪たるものは、キリストを受けとらざることが罪ということだから、

「こんな勝手なことがあるか」

と言って、世は憎むんです。もうこれが今でもその通り。

大体、キリスト教というものは――私だってまだ中学時代には、

「ヤソ教ばかりはごめんだ」

なんて思っていた。何も知らないくせに、何か妙な先入観で「ヤソ教は」なんて。

兄が内村先生のところへ行つて集会へ行きだした。なんとなく妙な気持が私はしていた。妙な気持をしてただけだけでも、兄のありさまを見ていると、非難するところではない。今までよりガラリ変わって、なにかしらないけれども、素晴らしいことになった。それは私は感じていた。けれども、なにしろ私は中学生ですから、兄は

「聖書を読め」

とかなんとか、そんなことは一言も言わないけれども、向こう側へ往つてからわかった。そのことは、キリストが、

「私が向こう側へ往つたらわかるよ」

と言われたのと同じようなことを私は感ずるわけです。

そういうことで、受けとらないものだから。私が語ったものだから、



「それを語ったものだから罪があった」

ということは、語ったから、お前たちは――語ったものは同時に「受けるか、受けないか」ということがすぐそこでもって直結した事態ですから――それだから罪がある。即ち、不信。不信が罪です。

「こういう悪いことを思いました、悪いことをしました」

なんていうのは罪のただ枝葉です。キリストに属する者を、

「集会に行くからけしからん」

と言つて憎む。これは世の方はすぐそういうことになる。まああなた方がじかじかにいろんなことを経験なさっているようなわけですよ。

●真理の御霊きたらん時

されど今はその罪いいのがるべき様なし。

どうにもならんと。

²³我を憎むものは我が父をも憎むなり。

お前たちを憎むのは私を憎む。私を憎むのは父を憎む。父を憎むような世というものは一体何かというと、こいつはサタンの手下だから。このサタンというやつが闇の君主だから。「この世の君」というサタンがいる。実は世はサタンの手下。世に属する者も実はサタンの手下です。

「われ神のごとく」

といって、自分を神にまで祭り上げようとしたところが、これが高慢の霊というやつ。

ダンテが山に登ろうとしたときに獅子と狼と豹が現れた。獅子は高慢の象徴。狼は貪欲の象徴。豹は肉欲の象徴。この三つのやつが現れた。この獣に打ち勝って、この道を通つて山に登った者は一人もいないという。みなダメだ。自分もどうにもならんと言って、彼は引き返して杒然^{ぼうぜん}としていたら、彼の先輩のバージルが現れてというようなわけですよ。

そういう罪の一番わるいのは、この意志的な罪なんです。まだ情欲の方は自然的現象の方のあれですから、罪としての重さは軽いんですけれども、この意志的な罪が一番重い。高慢というやつが意志的な罪なんです。叛逆の霊ですから。叛逆の霊は地獄のどん底に落とされてしまう。

だから、受けとらない。受けとらないで、その叛逆の霊は憎むということになる。それからもうひとつ、憎みと同じ兄弟みたいな悪い罪は妬みというやつ。妬みと憎しみは悪徳の兄弟。もう世の中はこれでもってガタガタガタガタやっているんだ。第一、カインがなぜアベルを殺したか。妬みからきている。妬みとか憎しみとかいうやつ。

そういうわけで、

父を憎むならん。²⁴我もし誰もいまだ行わぬ事を彼らの中に行わざりしなら



ば、彼ら罪なかりしならん。

イエスのもの凄いケタちがいな次元のちがつた行為です。奇蹟的な行為。それが今度は、パリサイ人、^{びと}学者、教法師の妬みをかったんです。

「なんとかしてあいつを、あの新興宗教をやっつけてしまえ」

と。民衆がみんなキリストの方になびいていきますから、彼らは民衆を取られたようなことになってしまったものだから妬んだ。ああいうご連中は今度は妬みなんです。妬みと同時に憎しみになった。

然れど今ははや我をも我が父をも見たり、また憎みたり。

もうはつきりと、

「私を見た者は父を見た。私が為すことみな父の意志とその業が私を通して現れた」

と。そうしたら、いよいよ彼らは憎んだと。

「いやだな。福音というのはそんな妬みだの憎しみだの愛だのが葛藤している世界か。だから、聖書はしつこいからよそう。仏教の悟りの方が無難だ」

なんて、そう思う人が出てくるわけですね。

「どうも日本人の肌にあわないな」

なんて。

²⁵これは彼らの律法に「ひとびと故なくして、我を憎めり」と録したる言の成就せん為なり。

「律法に」と言ったって、これは詩篇の中の言葉です。

²⁶父の許^{もと}より我が遣さんとする助主^{たすけぬし}、即ち父より出づる真理の御霊^{みたま}のきたらんととき、我につきて証せん。²⁷汝等もまた初^{はじめ}より我とともに在りたれば証するなり。

さっき言いました「真理の霊」ということがよく出てくる。16章13節にも、

「¹³然れど彼すなわち真理の御霊きたらん時、なんじらを導きて真理をことごとく悟らしめん。かれ己より語るにあらず、凡そ聞くところの事を語り、かつ来らんとする事どもを汝らに示さん。」(ヨハネ16・13)

と書いてある。14章17節にも、

「¹⁷これは真理の御霊なり、世はこれを受くこと能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。」(ヨハネ14・17)

とある。



●まずキリストにぶつからなくては

なかなか今日のところは、難しいといえば難しいところですよ。どういようにやっていきましようかね。

「キリストを愛する」

ということ。とにかく、まずキリストにぶつからなくてはいいんですよ――まだ「愛する」はちよつと早すぎたかな――福音書のナザレのイエス・キリストにぶつかるわけです。私がしよつちゆう言っているとおりの、これはドラマだからね。そうすると、

「なにかしらんが、この人はケタがちがう。その言うことを為すこと、ケタがちがう。」

自分のいろいろな判断やなにかでどうにも始末がつかない」

と、そう言つてこれに降参すれば、もう道は早いんです。

ところが、なかなか降参しない。まず、本当にいきなりキリストに来ればいいんだけど、普通はキリストに來ないで、いわゆる教会の牧師さんに来てみたり、註解書に来てみたり、いろんなことをやっているわけだ。友人に来てみたりね。そしてそこでもって間接的でありながら、

「キリスト教はどのようなものか」

とやっているわけだ。それだもんだから、何か反発を感じる。たいていそうですね。何か、似て非とまではいわなくても、間接的な、本当にそれを証し人として現していないところのものにぶつかつて、そして、キリスト教がどのようなものか、

「あれはクリスチャンのくせにこんなわけだから、あんなキリスト教なんてよそう。」

教会へ行つてみたが、ひとつも生命がないから、もうキリスト教はよそう」

なんて、いろんなことでもってやめてしまふんだよな。そして、ある意味においては、反感をもつて、

「どうもちよつと反感を感じる」

とか、なにか逆らしいの気持ちが出てくるようですね。それから、普通の生活の楽しみを何か非常に禁欲的にしてしまうだろうと思つて、それで警戒してみたり。いろんな因子がはたらいで、どうも来ない。

それは実はキリストに来ていゐるわけではないんです。だから、とにかく、生まの聖書そのものに、聖書に立ち帰ることです。それもただ聖書の文字に立ち帰つたつてダメです。ギリシア語やヘブライ語を一生懸命で研究して、それがまた文字に躓いてしまう。それはキリストではない。それは聖書の文字なんだ。キリストは不立文字なんです。文字に囚われていてもまだダメです、解釈、意味なんてことに。解釈や意味だつて、いくら聖書にきたつてダメなんだ。

その言葉を通して奥の世界、ドラマ、その現実の主体であるところのキリストにぶつかる。これをやれば、どうしても次元の相違と、もの凄い権威と、その力、生命に――まあ何と



でも言えないようなものに――圧倒されるから。そして、降参すれば、キリストの中にも飛び込まざるを得なくなるわけです。

キリストの中に飛び込まざるを得なくなったら、これが本当のキリストへの愛ということになる。こちらの何か人間的な感情で、愛するの愛せないのと、そんなことではないですよ。「愛する」ということをそういった感情的なものに思ったらダメです。「愛する」とは、「キリストの中に飛び込む」

ことである。飛び込まざるを得ないところの、ある事態が

「キリストを愛する」

という事態です。そうすると、それが「信」ですから。

「キリストの中に飛び込まざるを得ない」

ということが信なんです。

「信仰とはキリストの中に飛び込まざるを得ないことなり。キリストは神の子であるという命題を信ずるにあらず」

と。イエスという人物は、何だつていいですよ、とにかく、

「これにはもう参った!」

と言う。それから、それが神の子であるか、何であるか、それからわかったらいいですよ。そういったいろんな概念がわかってから信ずるなんて、そんなものは本当の信仰でも何でもない。

●自我が降参しなくては

もう少し卑近な例でいうと、男女の恋愛だつて、パツと火花がちるようになったら、それが本当なんだ。まずその素性を考えて、それから性格を考えて、どうのこうのと。それから恋愛しましょうなんて、そんなものは本当の恋愛ではない。

その実体につつかつて、もう気合がかかってしまう。そういうようなのが、このキリストへの飛び込みです。それが「信」という。信じてみたらば、本当の「知」が出てくる。知から信ずるものではありません。探索してから、研究してから信ずるではありません。信の世界から本当の知が展開していくのです。そのことは聖書にちゃんと書いてある。

そうすると、罪の罪たるものが、そのようなことを受けとらないことがいかに罪であるかということがわかるわけです。

「でも、私はこれくらいは、何パーセントは善いんですが」
なんて、そんな呑気な世界ではない。

だから、キリストに本当に飛び込みますと、罪がわかるわけです。そして、罪がわかるということは、罪の主体なる自我というものがここで降参しなくてはいいかん。降参というのは、自我が降参しているんだから。主体であるところの自我、これがいかに逆らうもの



であるか。即ち、自我そのものが憎しみの毒素を持っているものである。すぐ逆らったり。だから、ミルトンもあの『パラダイス・ロスト』で言ったでしょ。

「人間の最初の神への不従順が罪である」

と。逆らいが罪なんです。不従順を言い換えると、逆らいだよ。従順ということは、それに即するということだ。従うというのは、

「まあ仕方がないから従う」

なんていうのは従順ではない。それは屈従という。従うというのは、もう喜んでそれに吸い込まれていくような、

「ああそうです、そうです」

と言って、喜んで自分を任せていくのが本当の従なんだよ。だから、それはむしろ信頼と言った方がいいわけです。信じ依り頼む。信頼とはい言葉です。「信ずる」ことは実は「信頼」で、「を信ずる」ではない。「に信頼」することが信である。キリストが「羔」というのは、神さまに完全に信頼しているから羔という。

今朝、私はちよつとテレビで聞いてみると、高校生が

「宗教なんて全然、関心ありません」

なんてはつきり言っているよ。何かみんな主我的なんです。自我の目覚めは結構ですけれども。それが一切だといって、それで全てがいくと思つたら、とんでもない間違いなんだ。高校3年生から大学生に向かつてははつきりこの宗教の世界を――人間は相対的な存在としては、社会問題も政治問題も大いにやってください。けれども――人間は相対的な存在の奥に絶対的な存在という次元を、大事な相を持っている。この絶対相が、人間のいかなる文化的な事態をもつてしても解決がつかない。それが正にこの宗教の世界なんです。このことに教育者も本当の目覚めを持っていないから、あきれてしまうよね。あなた方は絶対にこのことを証しする使命がありますよ。

●己を憎む

そういうわけで、「自我」というやつがこれが罪の主体であつた。そうすると、自我というやつは何だろうと思つたら、サタンの手下になつていたという。これはサタンに従っているんだ。自我なんて言つて大いに威張っているけれども、実はこれはサタンに従っていた。

「神に従うか、サタンに従うか」

でもって対立しているわけです。サタンに従うやつは神に従うやつを憎むんだ。

ところが今、ヨハネ伝のここを読んで、

「世は汝らを憎む」

と書いてある。

「世は憎むから、私たちもあいつらを憎む」



とは書いてない。そこに注目しなくてはいいかん。

そこで、キリストが何と言われましたでしょうか。ルカ伝14章26節、27節はきわめて大事なところです。いわゆる盛んなる夕餐の譬話のあとで、

「²⁵さて大なる群衆イエスに伴いゆきたれば、顧みて之に言い給う、²⁶『人も

し我に^{きた}来りて、その父母・妻子・

妻子とまで書いてあるね。

兄弟・姉妹・己が生命までも憎まずば、わが弟子となるを得ず。²⁷また己が十字架を負いて我に従う者ならでは、我が弟子と^な為るを得ず。』」(ルカ14・25

～27)

「己を憎む」ということと、「己が十字架を負う」ということが同じです。このルカ伝のキリストの言葉は最も激しい言葉です。

「自分自身を憎むのでなければ私の弟子にはなれない」

「弟子にはなれない」ということは、

「私と一つになれない」

ということですよ。キリストの師弟関係なんていうものはいい加減なものでない。

「自分自身を憎むのでなければ、私と一体になれない」

と。これ最も困難なるものです。「己に克^かつ」という言葉がある。

「自己に勝つものは城を攻め取るよりも更に難しいことである。自己に勝った勝利

者は最大の勝利である」

と、哲学者カントも言った。自己に勝つというが、その本当の勝ち方は「自己を憎む」という。

パウロがとうとう自分のことを「塵芥^{ちりあくた}」として棄てるような気持で、吐き捨てるように言った。

あんなに自己主張していたサウロ(パウロ)が、このキリストにづくわしてキリストに降参したら、もうこんなものはどうでもいいと。我とわが身を棄てるようなぐあいと言った。

●己を愛する

しかし今度は、その創られたものにはなにも悪いものではないですよ。パウロさんだって大事な器なんだから。あなた方一人びとりはみんなそうなんだ。何かというと、自己中心であるその自己がいけない。私たちはみな「神の似姿」につくられているんですから、どなたでも。神の似姿にね。これは神的な存在なんだ。仏さんの方では、みんなこれは仏性を持っている。

ただ残念ながら、それをこっちの絶対者との繋^{つな}がりをとってしまつて、これ自身を、相対的な自分というものを絶対化したところが罪なんだから。この繋がりがもういつぱんく



れば、今度はこれがいわゆる主我的な我でなくなるから。

私たちはキリストのことを

「主よ」

と言っている。主は向う側なんです。こっちはお客さん。自分が客体となる。客体たる自覚になる。

客体たる自覚になったら、このものは今度は証し人、栄光の顕れとなりますから、棄てたと思った自分を完全に今度は生かしてください。どこが悪いのどこが善いのではない。全的にこれを生かす。そして、すべて変質変貌していく。その人の長所も短所も全部これをひっくり返して、本当のプラスのものにグングン変えられていく。そういう根底的变化をして、その人らしく、その人らしきが出てくる。

どうも、自我の強い人がありますよね。私はどうかしらんけれども。自我の強い人が、
「あれは自我が強くて、どうも付き合いにくいな」

なんて。けれども、その人が本当にぶつつぶれて、その自我が神の栄光に顕れて、もう自分なんてものはどこかへいったようなことになって、善きことに対して本当に強い人になる。ああ素晴らしいと。

パウロがそうなんです。パウロの構造がなんと素晴らしいか。パウロが福音を徹底的に言いながら、いろんな誠命いまいめを言っている、あの周到的な言葉。あれはみんなそこから自ずから発しているところの花なんです。

そういう根底的な変化は自己をまず、

「いつくしみとにくしみ」

と言うが、「憎しみ」という言葉が決して悪くはなかった。これは己に対する言葉であつたということに皆さんが気がついていただく。自分を憎む。

「こんなものはもうしょうがない」

と。ということは、誤解しては困りますよ。自己中心である自我というものを、自己というものを憎んで、それがもう神中心、キリスト中心になったら、本当の大乗的な意味においてはこれは自愛となる。

「己の如く汝の隣を愛すべし」

という。自己を愛することがいかに人間にとって根底的なことであるか。

「誰か自己を愛せざらんや」

という言葉があるよね。エペソ書5章29節に、

「²⁹己の身を憎む者はかつてあることなし、皆これを育て養う、キリストの教会に於けるも亦かくの如し。」(エペソ5・29)

「己の身を憎む者はかつてあることなし」

と書いてある。誰でも、



「己を自愛ください」

なんて言わなくても、みんな自愛しているよな。キリストも、

「己を愛するごとく隣を愛すべし」

と。あの時にキリストが、「己を愛する」ということはただ手放しで肯定しているのではない。

「己を愛するのは本当に強い衝動だが、その強さをもって隣人を愛せよ」

と。ということとは、

「己を憎め」

ということ。己を憎むことが、もうひとつ逆にいうと、本当の意味で己を愛することになる。

「わがうちなるキリストに即した大我を愛せよ」

ということ。

●いつくしみとにくしみ

「天上天下唯我独尊^{ゆいがどくそん}」

と言ったあの「唯我独尊」はその意味の愛ですよ、お釈迦さんのあの言葉は。

「この弥陀の本願は親鸞一人のためであつた」

なんていうのはみんなそういう意味の、根底的な即した愛の世界です。そういう意味の自愛です。いわゆる小我の自愛ではない。真理のためにこれは棄てるわけにはいかんと、今度は。

「キリストの真理の証しのために私は簡単に死ぬわけにはいかん」

と。私もそうです。これは一戦を交えなければ。「デイベイン・リベンジ」「聖なる復讐」をしないでは死ぬわけにはいかんですよ、私は。神さまのために、神に即して真理のために復讐しないでは。「復讐」という言葉はあまりよくはないけれどもね。ユダヤ人が好きな言葉なんだ、この「復讐、報い」というのが。

「喜べ、喜べ、汝らの報いは天にて大いなるべし」

という。

そういうわけで、「いつくしみ、にくしみ」というやつが実はそういう非常に深い微妙な――微妙というか何というか――関連のうちにある。手放しの「にくしみ」でも、いわゆる人間的な感情としての「いつくしみ」でもないですよ、今、私が言っているところの事態は。

サタン中心の、サタンに従っている自我をやつつけるということは、逆に今度はサタンに対するところの否^{いな}である。本当にサタンのなものに対して「否^{いな}」と言うことは、それで自己を肯定していることはありえない。それはその手下になっている自我をやつつける。そうすると、ヤコブ書にも、

「汝らのうちに住まわした霊を神さまは、キリストは妬むほどに愛し慕いたも



う」

と書いてある。「妬み」という言葉がまた出てきた。旧約で「妬みの神」という。

「我は妬む神なり」

「サタンに囚われるのを私はとても堪えられないので、そいつを奪い返してやる」

というように意味で、「妬みの神」という。熱愛して、滅びの世界に持つていかれる霊を何とかして、惜しくてしょうがない。愛惜するわけです。この愛惜がこの妬みなんです。そういった意味において、神さまはサタンから奪い返す。

ペテロはキリストに、

「いや、そんな十字架は、それはいけませんよ」

と言つて、ペテロは人間的にキリストをかばおうとした。キリストはペテロにその時に、

「サタンよ、退け！」

と言われた。

「人間的なそんなもので、お前は逆にサタンの世界に入れようするのか。冗談じゃない。自分は神にこれ従う。神の意志にこれ従うことが自分の世界だ。私は人々の罪を一身にしょつて十字架にかかる」

と。

●愛線と義線のクロス

そこで今度は、十字架のことになる。十字架は縦の線と横の線です。

「隣^{となり}を愛せよ」

という「隣」というのは横だ。愛の線は「愛線」とでも言おうかな。縦の線は「義線」。「神―キリスト―我」というこの関係が垂直に立っている。これを義という。これが本当に信従、信じ従う世界です。信頼の世界。

「汝の御意を成させたまえ。わが意にあらず」

という、このキリストの祈りが即ち義である。義であるということは、本当に自分をぶちまかしているということは、同時にそれはまた愛でもあるんですよ。義、愛、とでもいいいますか。愛の要素がないような義なんてものは冷たくてしょうがない。軍隊の

「上官の命令は絶対服従」

なんてのは、ちよつとそういう愛の面のないような義かもしれないね。

「部下を大いに^{いたわ}り愛せ」

なんていう言葉はもちろんあの「軍人勅語^{ちよくご}」の中にもあったけれども。

これがまず義の線ということ。義の中にはもちろんそういった深い愛が含まれていますけれども。それから、愛はこちらで限りなく横に向かつて進む。

仏教的な大慈大悲というのは、こういうクロス、十字架の相^{すがた}にならない。仏教的な大慈



大悲はやはりこれは円現だね。私は円現が大好きなんだけれども。仏教の相が円現で、キリスト教は十字。円だつて球だつてちゃんと中心がある。そして、こういうようにちゃんと構造としてガッチリとはられるもの。これキリスト教と仏教であるなんて。キリスト教と仏教といいながら、しかし、本当にこれが本当の意味の円現になるためには、この福音の世界が実は本当に持つている。仏教的円現は、へたすると、いびつになるよな。けれども、この円はいびつにはならない。まあこれは例えですけど、ちよつとそう言いたいところだね。

はつきりとこの義が立つ。これが、

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、主たる汝の神を愛すべし」

という縦の義の線のところにその愛が来ているわけです。

「任せろ。心配いらん」

と。今、自分がどうであるかどうかであるなんて、何も心配いらんと。心配、恐れ、疑い、みんな要らんです、この世界にきたら。

そうすると、この線はずつと横に展開せざるを得ない。むしろ、私がいつも書いている幕屋(三角錐体の形)の方がそういうことをよく表しているね。神・キリストという大黒柱(垂線)があつて、底面(三角形)のabcにいつも上からこの各個人に来ていて、abcの關係はグルグル環流する。環として流れるという。こういう事態が即ち愛の事態。これが即ち義の事態ですから。

けれども、十字架が表しているのはひとつのクロスという面がある。なぜ、そんなクロスしなければならぬのか。実は愛するんだけれども、神さまの愛はきているんだけれども、これは無条件に人間がこれを信受することが実際はできていないんです。キリストなしに本当に神の中へそのように本当に突入して、そして、その信の世界へいくということは、人間は根底的に失われた面を持つていて、どうにもならないところが、それが罪ということで、

「義人なしひとりだになし」

という。その義の線を本当に全うする者がひとりだになしという。

だから、もうひとつ言い換えると、神さまは本当は愛するに価しないものを愛しているんだ。この縦の關係の中には。愛するに価しないもののために愛する。私たちを、愛するに価しないものを愛するのが神の愛ですから。大体、普通の人間の愛というものは、相手がいいものだから愛したりする。何かそこに価値がある。価値あるものを愛している。価値なきもの、いや実に私たちは本当は、パウロがローマ書5章でも言っているとおり、キリストに背いている。背いているものを愛する。



●贖いによって赦す

また、ヨハネ伝3章16節にも言っているとおり、

「¹⁶それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。」(ヨハネ3・16)

「神は世を愛したまえり」

と。神は世を憎んだとは書いてない。

「その独子を賜うほどに世を愛したまえり」

という。世に属している私たちを、まだ信頼もないのに、その私たち一人びとりを愛している。「何とかして」と言つて。しかしながら、それを愛しても、「ああ、よしよし」というわけにはいかない。義の線を貫かざるを得ないというところに神さまの側のひとつの矛盾的な要素がそこに――義と愛とは一つでありながら――しかも、矛盾的なものを感じるという構造になるわけです。いいですか。

その矛盾をいかにして解決するかという、その解決の道は一つしかない。この愛は直接の愛であつたんだが、直接の愛では済まなくなつた。相手が背いているから。この愛は赦しの愛にならなければならなくなつた。赦しも、義の面をいい加減にして赦すわけにいかないんです、この福音の世界は。赦しは今度は、どうして赦すかというところ、^{あがな}贖いということによって赦す。

贖いとは何かというと、人の罪をすっかり背負つて、全部棒引きにする何ものかがなければ、この贖い、赦しの愛というものは出てこない。そこにキリストの「十字架」というものが、神の愛の必然の動きとして現れてくる。それは旧約聖書が表しているものをはつきりとこのキリストが受けとつたわけです。

憎むに価するものです、逆にいうと。愛するに価せずして、憎むに価するものを愛したという。憎しみを愛^{いっく}しみに変えているその愛^{いっく}しみは赦し、贖いをうちに持ったところの愛^{いっく}しみである。それは人間の罪がどうにもならんから。ここに罪なき者が罪ある者の罪を背負つてという、荷^{にな}つたということ。荷^{にな}ければ本当の赦しではない。いわゆる

「よしよし、まあいいよ。忘れてやるよ」

なんてなことではない。それは完全に処分がついてしまった。罪の処分は、自分自身が十字架されることによって、私たちの罪の処分がそこについた。人間の一切の判断を超越するところの事態です。これを絶対恩寵^{あんだん}といわずして、これを受けないのが罪という。だからもう、ギリギリのところ^{ギリギリ}に迫られるわけです、この福音というものは実は。いい加減なところで聴いているわけにいかない。

「ああ、もうそんなちよつと人間の判断に苦しむようなことなら、キリストはやめましよう」

なんて。どうぞやめてください、結構ですから。魂の世界はそれで解決がつかなら、やつ



てみてください。そしてまた、ぶつかって、「どうにもなりません」ということになったら、またキリストのところへ帰ってくるわけです。それだけの話です。理屈でもって説明する世界ではない。

●救済の愛

今日は新しい人がもう少し来るはずだったんだけど、やっぱり世を愛したとみえて、来ないんだ。なかなかこの福音というやつは躓きの石なんだね。

「どうも、ちよつとまあしばらく待つておこう」

なんて。「しばらく待つておこう」という衝動がいけない。

「何でもいいからひとつぶつかってみよう。ぶつかって砕けてみよう」

という、その気合がかかってこなければ。福音の世界は、分かるの分からないではないから。それで、私たちには、

「キリストの、神のいつくしみというのは、赦しの贖いを持ったところの愛である」

という、そのほかにこの神さまの愛の本質的性格がないわけです。本当は直接的に愛したいんだけど、どうにもならないというわけです。それが実は救済の愛なんです。救いである。これが救いです。救いの愛です。もうひとつ別な言葉でいうと、「カリス」「恵み」ということ。恵みとは何かというと、そのことが恵みです。

「恩恵と真理めぐみ まこととにて満てり」

ということが、これが恵みという。何かいいものを恵んでやるなんて、そんな恵みとちがう。イエス・キリストという恵みを全的に与えるというのがこの恵みという言葉です。

こちらの不真実にもかかわらず、背きにもかかわらず、徹底的に愛してやまず、救わんとしてやまずというのがこれが「真理」という。神の真理というのは、そのような、相手を神の世界に、神と同質のものに、キリストと同質のものに救いあげてやまないという、この事態が真理の性格なんです。

「真理の御霊がきたるときがある」

とはそういうことなんです。客観的にこれは真理だろうかどうかなんて、そんなことを人間の理性でもって判断できるような真理は、それは相対界の真理であっても、福音の真理とはちがう。「真実」という言葉でもまだちよつと足りない。もう何とも言えませんですね、これは。

そういうようなわけで、「にくしみ」ということは、世は福音を受けとらないから、憎んでいる。けれども、憎しみに対する憎しみをもってしない。ユダヤ人にはそういう面が昔はよくあった。いわゆる、

「**齒には齒を、目には目を、生命には生命を**」

というやつ。それがユダヤ的なしつこい報いというもの。



それはしかし、キリストの報いというものは、自分の生命をとるものに逆に生命を与えるという、こういう返し方をキリストはする。己を十字架にかけた、これはもう憎しみのきわみです。憎しみのきわみを赦したんです、彼は。

そして、この罪をしょった。これ以上のものが世の中にあるか。

「敵を愛せよ」

とは、敵を本当に、憎む敵を愛したキリストだけが本当にこれを成就した。そのキリストの中に私たちが入れば、敵を愛するということが可能で、もう憎しみなんていうこういう言葉が私たちの心の概念から抜けてしまう。けれども、罪に対する憎しみというのは、人間を憎むということとはちがった意味において出てきますから。

「ああ、あんなやつは憎らしい」

なんてね、あの「憎らしい」という言葉は自然に口から出なくなってくるわけです。もちろん、人間の感情にはいろんなものが、雲が去来するように、しましうけれども、もうひとつすぐそれを消してしまうところの、もうひとつ奥の世界がその人をいつも本当の平安に置くわけですね。

●我はエホバなり

レビ記の19章というのはちよつと大事なところだ。レビ記の19章2節に、

「²汝イスラエルの子孫の全会衆に告げてこれに言え、汝等宜しく聖あるべし、

そは我エホバ汝らの神聖あればなり。」(レビ19・2)

これは今日は直接に関係のあるところではないけれども、きわめて大事な一句ですから、ついでに覚えておいてください。今、私が引用しようとするのは17節、18節、

「¹⁷汝心に汝の兄弟を憎むべからず、

キリストが「兄弟を憎んだり怒ったりするのは殺したんだ」と言っただしよ。

必ず汝の隣人を勧戒むべし。彼の故によりて罪を身に受くる勿れ。¹⁸汝仇を

かえすべからず。

復讐してはいかんと。仇をかえすのは神さまの仕事だと。

汝の民の子孫に対して怨みを懷くべからず。

怨み、妬みというのはみんな兄弟ですから。

己のごとく汝の隣を愛すべし。我はエホバなり。」(レビ19・17、18)

この、「己のごとく汝の隣を愛すべし。我はエホバなり」の

「我はエホバなり」

を忘れてはいかんですよ。

「私がお前の神だから、私はお前をこんなに愛しているだろ。そうすれば、隣を愛せざるを得ないだろ」



そうくるわけです。そういうように読んでいかなければ、本当の力ある読み方にならない。

「我はエホバなり」

と、なぜ終りについているかというところ、このグルント（基礎）なんです。これが根底なんです。

「我はキリストなり」

と、私たちに。「我なり」と、こないだ言ったでしょ。

「心安かれ。我なり。懼るな」

と。あの三つの言葉のうちで一番大事なのは何かという、「我なり」という言葉です。

「私だよ」

と。この「私だよ」という一言でもって、もう一切は雲散霧消してしまう。そして、本当の平安の中に入っていく。何も心配いらん。この「私だよ」というキリストと一緒にいるんだから、もう何も心配いらん。だから、

「我はエホバなり」

というのもそういう意味です。「私ヤーウエーだ」と。

「我はエホバなり。だから、お前は隣を愛すべし」

と。やはり、旧約の中にそういうもう新約の福音的なきらめきがチラッチラッと――チラッところではない――もう深く光っていますから、そういうのを見逃さないように見ていかないとね。

イザヤ書63章8節から、

「8 エホバいたまえり、誠にかれらはわが民なり、虚偽をせざる子輩なりと。」

斯てエホバはかれらのために救主となりたまえり。9 かれらの艱難のときは

エホバもなやみ給いてその面前の使をもて彼等をすくい、その愛とその憐憫

とによりて彼等をあがない、彼等をもたげ昔時の日つねに彼等をいだきたま

えり。」（イザヤ63・8～9）

「ミットライデン」（同情）は神さまの「ミットライデン」だから、神さまは共に悩む。

「キリストは私たちを思いやる」

という言葉がヘブル書4章にある。キリストの思いやり。神も共に悩んで、

「その面前の使をもて彼等をすくい」

と。本当にこの天使はあるんですよ、皆さんの守り天使というのが。

ある人がこないだ奥さんを亡くしました。もうどん底にたたき落とされたように悲観したわけです。

「大丈夫です。あなたの奥さんはあなたの守り天使のようです。非常に近くにおられますよ」

と私ははつきり言ってやった。

霊界は、人は相対的存在としていなくなつたからといって、過去ではない。常に現在な



んです。私の母も兄も、これはみんな現在している。世の終りに向かって、私たちは今こうやって一緒にこうやっていられるけれども、まあそのうちにみんな人生の離れさまがまなこになるわけです。そういう空間的な近くだの遠くだのということをもうひとつ超えて、霊的空間においては常に近い。魂のあい応えるものは霊的空間で常に近い。地上であろうが天上であろうが。そして、やがて向う側に往きまして、類は友を呼ぶというようなわけで、神さまはそれぞれ然るべきところに置いてゆく。そして、神の国に向かって待っているわけです。神が生き、キリストがあると、我々がそれにあってもう完全に自我というものから救い出されて、今度は聖霊が、キリストが出てくるんだ。

●真理の御霊のきたらるとき

今度はまたヨハネ伝にいきましょう。「真理の御霊がきたらば」という。

26 父の許より我が遣さんとする助主、^{たすけぬし}即ち父より出づる真理の御霊のきたら

るとき、

真実を貫き、本当のまた主体的な真理を展開するところのその御霊のきたらるとき、

我につきて証せん。

その時にはもう福音書に書いてあるキリストのことは――いやもうキリストに限らず、キリストを通して現れている使徒たちの書簡であろうと、使徒行伝であろうと――もう楽に読めてしまう。

「もう真理の御霊がきたら、人々はお前たちに何も教える必要がない」

と、あのヨハネ書簡の中にも書いてあるとおりです。そして、助け主は、キリスト自身も助け主ですから。

まああなた方ね、この「御霊」とか「聖霊」という言葉を少し注意して読んでごらんよ。パウロの書簡や何かを。もうたくさん出てきて、こんなにもありましたかと驚きますから。「恵みの御霊」だとかたくさん出てくる。私はみんな印してあるから、チラチラ目に映るんだけど。ヘブル書13章6節に、

「⁶ 然れば我ら心を強くして斯く言わん『主わが助主なり、我おそれじ。人われに何をなさん』と。」（ヘブル13・6）

とある。まあ言葉はどうでもいいです。とにかく、キリストはもう助けるどころではない。本当の救い主だから。

「父の許より我が遣さんとする助主、^{たすけぬし}即ち父より出づる真理の御霊のきたらるとき、私について全部証しするから、私の言ったことしたことがもう全部浮き上がってくるぞ」

と。それで、この山上の垂訓の、

「汝の敵を愛せよ」



というのがはじめて本ものに分かってくるわけです。山上の垂訓のマタイ伝5章44節、

「⁴⁴されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇^{あだ}を愛し、汝ら責むる者のために祈れ。

⁴⁵これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。」(マタイ5・44)

「子であることを証しせんためなり」ということなんです。愛せば子となるというのではない。

「本当にお前たちが父の子ならば、愛するぞ」

ということ。そしてまた、責むる者にために祈る、迫害する者のために祈る。パウロがローマ書12章14節で言っているとおりです。

「¹⁴汝ら責むる者を祝し、これを祝して^{のち}誼^{のち}うな。」(ロマ12・14)

とにかく、みんなマイナスに対してプラスでいけと。向うがどんなにマイナスであってもこつちはプラスだと。そして、このマイナスをプラスに変えてしまうようなわけだ。

だから、その転換、そのいつくしみ。人間が「怒りの子」であるとか、「憎しみの子」であるとかいわれているのはみんなこれは「サタンの子」だということです。その^{かなめ}要が引つくり返るところはどこかということ、

「自分自身を憎む」

というところが、これが引つくり返りの要なんです。そこで180度の展開がくる。自我が吹っ飛ばされるから。

その憎しみが、自分を憎むということは実は手放しではできません。その可能なのが即ち、ちょうどクロスしているこの十字架が、自分を憎む、自分を棄てる、自分を拒否する。その可能ならしめるものがこのキリストの十字架です。

「我というものがキリストと共に十字架されたり」

ということは、自分を本当に憎んだということの实质は何かというと、

「私は十字架されてしまって、もう居りません」

ということ。

「もはや我れ生くるにあらず」

と。これは葬ってしまった。

「キリストわがうちに在りて生くるなり」

という本当のプラスになる。これは、

「キリストのいつくしみが、愛が、愛のキリストがわがうちにある」

ということ。だから、これがプラスとマイナスの転換がきてしまって、こうなる。そして、もはや世を憎むということも、そういう意味においては、もはや己を憎むということもなくなってしまうようなわけです。

●必ず天上で全くされる

しかし、地上においては常に自己は乗り越えられていくことを必要としますけれども、



常に乗り越えていくということをひとつの努力にしたらダメですよ。乗り越えられているんですから。既に己は乗り越えられている。常に己は葬られている。故に私はいよいよ楽に自分を乗り越えていきます。そして、本当のところに展開していきます。

これは去年、ピリピ書をやった時にも言ったでしょ。神の霊が、キリストの霊が入ってきて、ここにもの凄い原動力があるから、追求してやまない。

「父の全き^{まった}がごとく全かれよ」

というその全きへと追求してやまない。けれども実は、その中に父の全きが来ているんです、既に。

「キリストと同質な相^{すがた}が来ているから、いよいよ同質になって行けよ」

という。現実の相として、地上では全くきれないが、必ず天上で全くきれるときが来ると。これが福音が一切のイズムよりも驚くべき本当の現実を持ち、本当の理想を持っているということですよ。

そういうことで、もう妬みとか、憎しみとか、怨みとか、そういう世界は全部乗り越えられて、雲散霧消した福音の本当の愛。担いの愛、赦しの愛。救いの愛と贖いの愛というものが私たちの中に同質的に入ってくるから、これより他に、これ以上の世界がありますか。その角度からなら、もう社会問題であろうと政治問題であろうと何でもやってください。その人間の一番深い根底の魂の形成といえますか、質が据えられてきましたからね。それなくして、一生懸命でやってたって、これはもう相対的な世界では、やっぱりどうにもならない。それは相対的なある解決をやることは結構ですけども、しかし、それがすぐ憎しみとなりまして、棍棒を持ったりなんかするんだよね。そして、戦争。キリスト教国といながら戦争。また宗教の間で、宗教同士の宗教戦争なんてとんでもない。みんな福音の取り方が非常に偏頗^{へんぱ}であって、結局、自己義認というパリサイがそのことがすべて——もう自己義認というやつが、即ち結局、自我ですが——こいつがいろんな姿をなして世の中で悪いことをしている。人間の歴史をみても、社会現象をみても。だから、どうしても、この宗教ということが——宗教という言葉はあまり好きではありませんけれども——これが根底になければどうにもならないということがもう明々白々である。

どうぞ、皆さん、その意味で本当の証人^{あかしびと}になっていただきたいと思うわけです。もう、御霊の力強い愛がきたら、あなたの方の中にそういったものが、もう何かしら流れでも流れているなあと。写真に写したら映りそうだなと思うくらいに、あなたの方の中に澎湃^{ほうはい}として交流しなかったら。それが

「汝ら互いにあい愛せよ」

というこの愛なんです。観念でいくら「互いにあい愛せよ」なんていつたって、そんなものはすぐ消えてしまう。そんなものではないですよ。

